

Kynge Johan の主人公について

横 尾 元 意

I *Kynge Johan* の主人公

劇 *Kynge Johan* (1536-1538) は John Lackland を題材にした寓意劇、つまり歴史劇と道徳劇の合いの子 (hybrid play) である。それで、この劇の主人公は二通りに考えられることになる。まず、道徳劇の立場から言うと、その基本構造 Innocence → Temptation & Fall → Sin → Repentance & Conversion という過程を経験する登場人物 Nobility, Civil Order, Clergy である。一方、歴史劇の立場から見ると、確かに、ジョン王がこの劇の中心人物である。しかしながら、彼は劇の途中で姿を消してしまうのである。従って、この劇の題名 *Kynge Johan* との兼合いで、果して、この劇の主人公は誰なのかという問題が生じてくるのである。

蛸原啓氏は歴史劇としてみた場合、主人公はジョン王であるとしながらも、この劇を道徳劇として分析するのが妥当であるとして、Nobility, Civil Order, Clergy を主人公に見立てて無難な解釈を展開している。⁽¹⁾

また、T. B. Blatt も同じような考え方をしている。⁽²⁾ 一方、Irving Ribner は歴史劇としてみた場合ジョン王を主人公と考えるのは同じであるが、道徳劇としてみた場合 England を主人公にした political morality play であると評している。⁽³⁾ さらに、この問題について W. R. Mackenzie は、*Kynge Johan* は歴史上の人物を主人公にした道徳劇であり、さらにその主人公は a good or just ruler の典型にまで

理想化されているだけでなく、他の登場人物も道德劇の観点からみてその枠からはみだしていないと論じながら、それでも主要登場人物のジョン王自身が歴史上の人物であるので、*Kynge Johan* は完全かつ純粋な道德劇ではなく、ジョン王は半分の意味においてだけ劇の主人公であって、もしも完全な主人公であれば、劇は彼の死をもって悲劇として終わるだろうと割り切れない心中を吐露⁽⁴⁾している。

さて、ここで、当時の劇作状況を見てみると、伝統的宗教劇は、一様に、1500年を境にして衰微しつつあった。⁽⁵⁾ Miracle play は15世紀末期頃になると miracle-mystery, miracle-morality へと変質し、1530年代には neo-miracle, Latin neo-miracle も現われ、ついに、1540年頃創作されなくなるのである。また、Morality play は1500年を境にして moral interlude となり、1550年代には劇作が停止し、次第に姿を消していくのである。さらに、Mystery play も1500年頃、劇作が止むのである。そして、特に1559年の法令以後、東部から西部・北部の地方へと上演されなくなっていくのである。⁽⁶⁾

このように、Miracle play, Morality play, Mystery play が、互いに入り組みながら模索をしている1530年代に、反カトリック的な戯曲を書いていたのが John Bale (1495-1563) である。彼は、12歳の時、教育を受けるために Norwich のカルメル会修道院に入り、1514年には Cambridge の Jesus College に入学して、イングランド宗教改革に重要な役割を果す人達と接触しながら、そこに15年間に在学するのである。そして、1529年より Maldon, Poncaster, Ipswich の順にその土地の修道院長 (prior)⁽⁷⁾ を勤め、1533年頃に Ipswich で知り合った Thomas, Lord Wentworth の勧めで新教に改宗して、⁽⁸⁾ Henry VIII を Supreme Head of the Church として認め新教団を受け入れたのであった。さて、1534年には Oxford 伯 John Vere に仕えて宗教改革を推進する劇を書いていたが、1537年頃 Thomas Cromwell (1485?-

1540) のために、これまでの劇を改訂し新たに劇を書いて、彼の援助を受けながら劇団を組織して上演活動をするようになっていたのである。⁽⁹⁾ つまり、J. Bale は伝統的宗教劇が衰微していく過程を内側にいて見聞し、また、宗教劇を明確に区分することが難しい状況の中で、イングランド宗教改革者たちの影響を受けながら、*Kynge Johan* を創作したのである。⁽¹⁰⁾

従って、このような環境の下で創作された *Kynge Johan* について、それぞれの視点から主人公を設定したり、道徳劇の定式を持ち出して短絡的に割り切るのではなく、道徳劇の表現技法と歴史劇の題材が、どのような意図で、どのように取り入れられているのかを考察することによって、この劇の主人公を追求し、その実体を解明しようとするのが、この論考の目的である。

Ⅱ *Kynge Johan* と道徳劇の典型

ほぼ完全な形で残る最古の道徳劇は *The Castle of Perseverance* ⁽¹¹⁾ (1405-25) である。しかも、その規模が大きいだけでなく、それに続く道徳劇の持っている諸要素・諸形式を包摂していて、full-scope morality の典型的なものである。Peter J. Houle はこの用語を次のように定義している。⁽¹²⁾

“full-scope” morality: a play presenting the history of typical man throughout his entire life on earth culminating in divine judgement. Such a play is structured after the medieval allegory of the Psychomachia, has for its dramatis personae personified abstractions or universalized types, and is primarily concerned with enacting in visible terms,

and according to Christian doctrine, the moral progression of human life.

さて、*Castle of Perseverance* では寓意的人物が七大罪元はじめ33人も登場するのに、*Kynge Johan* には純粹に 寓意的人物と言いうるのは Civil Order, Imperial Majesty, Verity と Treason だけである。法王一派を成す Private Wealth, Dissimulation, Seditious Usurped Power は、名称上、寓意的是であっても、それぞれ歴史上の人物と表裏一体になっている⁽¹³⁾。また、Nobility, Clergy, Commonalty という寓意的名称も、抽象的なものを具象的に表わすというより、複数として取り扱わざるを得ないものを単一の登場人物としてまとめるために用いていると言える。さらに、劇作時代を考慮すれば、Imperial Majesty も Henry VIII を指差しているのは明らかである⁽¹⁴⁾。結局、この劇の寓意的名称を持つほとんどの登場人物は、*Castle of Perseverance* と違って、第一義に倫理価値の空間化を意図したものではないのである。それ故に、道德劇の特徴と言える Psychomachia ('War of the Soul-virtues and vices battle over the soul of man'⁽¹⁵⁾) を表現するものとなっていないのである。また、登場人物とくに、この劇を道德劇とみた場合の主人公 Nobility, Civil Order, Clergy は自分の行動を決定するのに内的苦悩をするということがなく、脅迫されて魂の死を恐れはするけれども、自分の罪過を省みて Death への恐怖を抱くということがないのである。従って、*Castle of Perseverance* に見られるような、父なる神の前での魂の救いをめぐる Justice, Mercy などによる天の会議も⁽¹⁶⁾、この劇には見当たらないのである。つまり、*Kynge Johan* は道德劇のテーマ<人間の魂の救いの成就⁽¹⁷⁾>との明確な関連性を欠いているのである。この劇は、一見すると道德劇であるけれども、その重要な諸要素が欠如・変質しているために、道德劇の視点から Nobility,

Civil Order, Clergy を主人公として分析しようとしても、この劇の主題から遊離した形式的なものになりがちなのである。*Kynge Johan* は純然たる道德劇として書かれたのではなく、当時の宗教劇の状況を反映した劇であり、それ故に、劇の主人公も単一の範疇では解明しつくされにくいものとなっているのである。

Ⅲ *Kynge Johan* と T. Cromwell の立場

Kynge Johan の本質を解明するのに、それが書かれた目的との関わりで考察するのも一つの方法である。それで、反カトリック劇を改作・創作して J. Bale が仕えていた T. Cromwell の当時の状況に検討を加えてみたい。

教会の最高首長の代理者である T. Cromwell が1534年の「国王首長令」に基いて、1536年2月「小修道院解散令」を出したのに対して、その年の10月初旬に、修道院解散の中止、Cromwell 達の排除を要求し、また中央集権に反対して、リンカンシャー並びにヨークシャーで反乱が起った。また、ローマから分離したとは言っても、法王と国王の二元体制から国王ひとりの統治体制になっただけなのである。⁽¹⁸⁾従って、Cromwell は国王に首長権があることを証明し、さらに、法王の教えは正統から逸脱していることを明らかにして、修道院の解散を正当化する必要に迫られていたのである。ちょうど、このような状況下であって、この *Kynge Johan* が書かれたのである。それ故に、J. Bale は T. Cromwell の目的すなわち、⁽¹⁹⁾イングランドをローマより分離すること、偶像を一掃すること、教会を迷信より解放することを目指しながら、王権を主題にして「国王首長令」の趣旨を唱道する劇として、この劇を書き上げたと考えられるのである。

もしも、この推論が妥当であれば、J. Bale には、ジョン王と法王一

派との対立の中で、法王には神的權威がなく、彼の一派は England に仇なす者達であり、他方、ジョン王は彼等の横暴に苦しめられ殺害され、また、彼が法王に反抗したのもイングランドの人々の為であり、さらに彼の王権は神より授った權威であって、その権力は教会にまで及ぶということを示して、王権の至上性を明らかにする必要があったのであり、少なくとも、Nobility, Civil Order, Clergy を主人公にして、彼等が罪に陥りやすく、しかし彼等に救済の道があるということを、第一義的に表現しなければならない必然性はなかったのである。

IV *Kynge Johan* と John Lackland

それでは、生涯を通して歴史に興味を持ち続け、有能な歴史家でもある J. Bale⁽²⁰⁾ は John Lackland (1167?-1216) に関わる史実を *Kynge Johan* の中で、どのように取り扱っているのでしょうか。

歴史の伝えるところによれば、⁽²¹⁾ 1205年7月12日 Canterbury 大司教 Hubert が死ぬと、修道士達の意に反して John は自分の友人である Norwich 司教 John de Grey を後継者として推し、他方、法王 Innocent III は Stephen Langton が選ばれるように企て、John と対立したのである。それで、John は修道士達を追放、財産を没収するという処置に出るのである。しかしながら *Kynge Johan* の中では、England による僧侶に対するジョン王への訴えに依って、彼が僧侶達の悪幣を粛清して王侯としての務めを果たしたことになっているのである。また、Nobility が Clergy に向ってジョン王を弁護したりして、ジョン王と Nobility の間は友好的に見えるけれども、実際には、1209年1月12日法王によって John が破門の警告を受けた後、彼は臣下達に忠誠の印として人質を要求したりまた、彼等に遠征を強要したり、したので、ついには 1215年8月16日以降、彼等の一部をフランスのルイ王子に付かせ

ることとなり、イングランドは内乱のような状況に陥るのである。さて、John は大司教並びに逃走した司教の財産を没収したのをはじめとして、聖職者、修道士、シトー派の人達を住居から追い出してそれを多額の金で贖わせたり、また、イングランドに住むすべてのユダヤ人を逮捕して身の代金を支払わせ、さらに、Flanders 遠征の為にシトー派から 40,000 マルクを絞り取ったり、ついで、遠征に参加しなかった貴族に兵役免除金を要求したりしたので、当時のイングランドの人達にとって、イングランドの財産を掠め神を追放したのは、*Kynge Johan* のいう僧侶達ではなく、John 王自身であると思われたのである。それで、1213年8月頃より、John への不満は人々を具体的な行動へと駆り立てていったのである。また、*Kynge Johan* の中には歴史的な事件だけでなく、John Lackland の王侯として問題となる行為も織り込まれている。England を貪り惑わす Clergy と Dissimulation が、ジョン王は Holy Church を馬屋のように扱っていると言っている個所⁽²²⁾があるけれども、これは1215年10月から12月6日まで、Rochester を攻略して滞在したとき、彼の兵が Rochester Cathedral の内陣 (choir) を馬屋がわりに使ったことに言及しているのである。また、John Lackland の統治は次の昇天祭1213年5月23日までに終るだろうという Peter of Pomfret の予言が的中し、John は昇天祭の前日の夕方 The Act of Homage に署名をして法王 Innocent III に恭順したのであった。ついで、その翌朝 Peter だけでなく、その息子をも、彼は絞首刑にしたのである。*Kynge Johan* の中では、これについてジョン王が、Peter Pomfrete は非常に迷信深い奴で冒瀆的な嘘つきと分かったので法が彼を処刑したのだと説明して非難をかわすようになっている。さて、1216年8月より John Lackland は Shrewsbury, Worcester, Corfe, Chippenham, Oxford, Reading さらに Bedford まで進軍するのであるが、その途中、反乱貴族の城や土地に害を加えただけでなく教会さえ

壊し、続いて、10月3日には Crowland の教会を略奪し、修道院の収穫物を燃やしたのであった。しかし、J. Bale はジョン王に

The prystes report me to be a wyckyd tyrant,
Be-cause I correct ther actes and lyfe unplesant. (ll. 1401-2)

と言わせて、彼に対する評価の観点を変えさせようとしている。また、ジョン王が自分の死期を悟って、次のように言う台詞がある。

More of compassyon for shedyng of Christen blood
Than any-thing els, my sceptre I gave up latelye
To the Pope of Rome, whych hath no tittle good
Of jurisdycon, but of usurpacyon onlye;
And now to the, Lorde, I woulde resygne up gladlye
Both my crowne and lyfe, for thyne owne ryght it is,
If it would please the to take my swole to thy blys.

(ll. 2022-8)

ところが、歴史上の John Lackland は、1216年10月14日 Sleaford で法王 Honorius に手紙で自分の子供達を託し、そして、10月16日には Newark に着くと、Croxtton の修道院長が John の告白を聞き、彼にサクラメントを授けたのであった。また John は神に王冠と生命を返上したとも言い得るが、実際は、遺言状を作成して息子 Henry を王位継承者と宣言したのである。

このように、J. Bale は *Kynge Johan* によって John Lackland の暴政にまつわる史実を、年代記に則して正確に再現しようとしたのではなく、それを詳細に取り上げながらも、ある一定の反カトリック史観が

ら取り扱うことによって、その実体が浮き彫りにならないような工夫をして、ジョン王を理想的な君主に仕立てているのである。

V *Kynge Johan* と新約聖書の相似性

ところで、この劇には John Lackland とローマ・カトリック教会との対立にかかわる史実が、T. Cromwell による教会制度の改革と呼応しながら書かれているだけでなく、新約聖書をも下敷きにして構成されているのである。

劇を通じて、登場人物が新約聖書の人物に準えられ対応させられているのが分かる。Pope は悪魔と緊密な関係にあるものとして取り扱われ、⁽²⁴⁾ Clergy はパリサイ人⁽²⁵⁾に、ジョン王を毒殺した Simon of Swinsett はユダに見立てられ、さらに、⁽²⁶⁾ イングランド出身のものを回心させる Verity は聖霊に、Imperial Majesty は再臨したキリストに結びつけられ、また、Private Wealth と Sedition は祭司長・長老の役回りをしている。そして、穿った見方をすれば、England は母マリアを念頭においているのかも知れない。それから、ジョン王はキリストに似せられているのである。それでは、ユダヤ人の王として生まれたイエス・キリストの公生涯とイングランドのジョン王における事件の類似点を中心に劇にそって例証してみたい。

England は僧侶達から土地財産を奪われ、Sedition によって自分の夫である神を追い出されて寡婦になり、ジョン王にその救済を求める。これは、パリサイ人が寡婦を食い物にしていたのと同じである。⁽²⁷⁾ 劇中でも、Clergy が偽善的で、悪い実を結び、blind leaders of the blind⁽²⁸⁾と言われパリサイ人に比較されている。

また、ジョンは England の訴えと Sedition より、修道院生活をする僧侶の放縦さを知って、寺院を接收し、馬や驢馬を取り上げ、生活費

の十分の一を要求すると、これがローマ法王庁に伝わって Usurped Power と Private Wealth と Sedition と Dissimulation が相談を凝らすのである。その結果、ジョン王は Private Wealth によって破門宣告され、また、ジョン王を殺害した者は免罪にするとまで布告される。これと同じように、キリストもエルサレムの神殿で宮清めをした後、祭司長や律法学者に命を狙われ、遂には、彼等が策略をもってキリストを捕えて殺す相談をするわけである。⁽²⁹⁾

さて、最期の時を悟ったキリストは十字架につけられるという苦い杯を飲み乾さざるを得ないのであれば、神の御心のままになるようにとゲッセマネの園で祈った後に、⁽³⁰⁾ ユダの手引きした祭司長・長老たちに捕えられ、仕舞いには十字架にかけられるのである。ところで、ジョン王が法王に屈服した後、Sedition はフランス王子ルイを扇動して彼を殺害しようと企み、また、一方で Dissimulation は毒入りの飲み物で、自分がその半分を飲んでまで殺そうとする。⁽³¹⁾ その時、自分はすべて義のためにやってきたのに England を除いた皆が反抗しルイを連れて来たことにジョン王が苦悶して、

The anguysh of sprete so pangeth me everywhere

That incessantly I thyrst tyll I be there. (ll. 2031-2)

と言うと、これを聞きつけて Simon of Swinsett が、毒入りの美味しい飲み物をジョン王に奨めると、彼はそれを知っているかのように半分だけ飲むのである。⁽³²⁾

また、十字架につけられながらユダヤ人のため執り成しの祈りをするキリストのように、ジョン王は王冠と生命を神に委ねて、僧侶達の悪行を許し、彼に不忠実であったものたちを罰しないように神に嘆願して死ぬのである。⁽³³⁾

There is no malyce to the malyce of the clergye !

Well, the Lorde God of heaven on me and them have

mercy !

(ll. 2123-4)

このようにジョン王とキリストの類似性を考えてみると、John Lackland が1167年12月24日 Oxford で誕生したと言われるのも偶然ではなくなるのである。

さて、聖書にはキリストが昇天したあと、彼の約束通りに聖霊が送られたと記されている。そして聖霊は人々を回心させ、キリストについて証しをなし「真理の御霊」と呼ばれている⁽³⁴⁾。他方、劇に目を転じてみるとジョン王の死後、突然、Verity が登場して、ジョン王が立派な王であったと論じ、さらに、彼を見捨てた Nobility, Civil Order, Clergy を悔い改めさせ、それぞれの義務に目覚めさせるのである。

ところで、この Verity を送ったのは Imperial Majesty であり、さらに、この Imperial Majesty に付けられる職分 the supreme head of the Church (l. 2354) と the true defendar of the Christen faythe (l. 2392) は聖書では、昇天後のキリストと再臨するキリストにあてられている⁽³⁵⁾。しかも、この「信仰の擁護者」(Defensor Fidei) という称号は Henry VIII が『七聖奠の擁護』(*Assertio Septem Sacramentorum*) を著して1521年教皇レオ10世より彼に与えられたものである⁽³⁶⁾。従って、J. Bale はジョン王と Imperial Majesty を別個で無関係な人物として描いているのではなくて、新約聖書を下敷きにして両者を連続した登場人物として、換言すれば Imperial Majesty はジョン王の再来であると表現しようとしているのである。つまり、悪魔たる法王の虜となっていたイングランド臣民は、ジョン王の死によって贖われ、聖霊たる Verity の導きによって回心して神の民となり、再臨したキリストである Henry VIII に治められて至福の中にあるという

贖罪の劇として、この劇を組み立てているのである。

即ち、J. Bale は John Lackland の Pope Innocent III との対立に関わる史実を弁護・脚色し、その一方で、登場人物を新約聖書の人物に準えることによってジョン王と Imperial Majesty を神格化して、1538年頃 T. Cromwell の期待した国王像を創作し、皇帝法王主義⁽³⁷⁾を称揚することによって「国王首長令」を唱道しているのである。

VI ジョン王と Imperial Majesty の連続性

こうしてみると、ジョン王と Imperial Majesty が劇 *Kynge Johan* の主人公を二人の登場人物で分け持っていると考えられる可能性も出てくるのである。もし、このように仮定すれば、まずジョン王は歴史上の人物というよりも没個性的 (impersonal) な登場人物であり、しかも Imperial Majesty と同じく理想的君主の典型として表現されていることを証明する必要が出てくることになる。というのは、ジョン王と Imperial Majesty が連続した登場人物と考え得るとしても、実際、ジョン王が Imperial Majesty と同類の登場人物にまで典型化されていなければ、そう結論するには疑問の余地が残るからである。ここで、冒頭の章で掲げた W. R. Mackenzie の指摘が思い出される。彼は、*Kynge Johan* のジョン王が a good or just ruler の典型にまで理想化されていると述べているのである。従って、果して、J. Bale は *Kynge Johan* の中で、そのようなジョン王像を作り上げているかが問題となってくるのである。

さて、劇の冒頭で、ジョン王は、まず、自分は神の意志と貴い命令によって統治しているのであり、すべての人々が正当な王に忠誠を尽すべきであると聖書に基いて宣言している。そして、国中で正義が行われるようにしながら England に対して成される不正を正すのが、神よ

り自分に託された義務であると述べている。また、彼は国民を片寄り見ることなく、その融和を計り、義務の遂行に当っては独断に走ることなく、しかも、自分一人でもそれに努力を惜まぬ熱意を持ち、果敢に行動する人物である。⁽³⁸⁾ さらに、ジョン王の武人としての実績についても、Nobility によって賞讃されている。

NOBYLYTE: This wyll I saye, sur; that he ys so noble a prynce
As this day raygneth in ony Cristyen provynce.

CLERGYE: Mary, yt apereth well by that he wonne in Fraunce !

NOBYLYTE: Well, he lost not there so moche by martyall chaunce
But he gate moche more in Scotland, Ireland and Wales.

CLERGYE: Yea, God sped us well, Crystmes songes are mery
tales !

NOBYLYTE: Ye dysdayne soche mater as ye know full evydent.
Are not both Ireland and Wales to hym obedyent ?

Yes, he holdyth them bothe in pessable possessyon,
And-by-cause I wyll not from yowr tall make degressyon, —
For his lond in Fraunce he gyveth but lytell forsse,
Havyng to Englund all his love and remorse;

And Angoye he gave to Artur his nevy in chaunge.

(ll. 566-78)

また、ジョン王が内的葛藤の末、Pandulphus に王笏と王冠を差し出して法王に屈服するのも、フランス王フィリップの軍隊に国民が殺戮されるのは忍びないという慈悲の思いからである。

Thy people wyll els be slayne here without number.

As God shall judge me, I do not thys of cowardnesse,
 But of compassyon in thys extreme heavynesse.
 Shall my people shedde their bloude in suche habundaunce?
 Naye, I shall rather gyve upp my whole governaunce.
 (ll. 1721-25)

さらに、貴族、人民、司教、法律家がジョン王に反抗してフランス王子ルイの軍隊を導き入れた時も、彼は自分のすべての行為は義のためであり、また死の間際にも、自分の喜びは貧しい人を助けることであったと⁽³⁹⁾述懐している。そして、彼の死後、England はそれまでの経緯を次のように総括している。

ENGLANDE: Alas, swete maistre, ye waye so heavy as leade.
 Oh horryble case, that euer so noble a kynge
 Shoulde thus be destroyed and lost for ryghteouse doynge
 By a cruell sort of disguysed bloud-souppers,
 Unmercyfull murtherers, all dronke in the bloude of marters!
 Report what they wyll in their most furyouse madnesse,
 Of thys noble kynge muche was the godlynesse.
 (ll. 2151-7)

これから分るように、史実に照らしてみれば明らかであるが、ジョン王は、青木信義氏の言う通り、⁽⁴⁰⁾歴史上の人物の名を与えられてはいるが、理想の君主というに等しい人物である。換言すれば、T. B. Blatt⁽⁴¹⁾の言うように、ジョン王には個人性 (individuality) が欠如しており、立派な王の典型より以上のものになっていないということである。つまり、J. Bale はジョン王を理想的君主の典型として没個性的 (imper-

sonal) に表現しているのである。従って、ジョン王は Imperial Majesty へ連続すると考えることが出来るのである。つまり、ジョン王は Ideal Kingship とでも名付くべき登場人物を Imperial Majesty とともに分担していると言えるのである。

Ⅶ 道徳劇への回帰

このように考えてみると、ジョン王が道徳劇 *Kynge Johan* の主人公と考えられるのに障害となる事柄、即ち、劇の途中で舞台から姿を消してしまうこと、歴史上の人物名を持っていることは自ずと解決してしまうのである。そして、この劇を道徳劇とみた場合でも彼が主人公と看做されるように表現されているのではなかろうかという問題が提出されるのである。

それでは、再び P. J. Houle の定義に戻って吟味しなければならない。すると、ジョン王は *Mankind* や *Everyman* に見られる普遍的人間とは違っているが、理想的君主という一つの典型を表わしているのである。また、England と法王一派を、それぞれ、Good Adviser と Vices に見立てるならば、ジョン王の魂をめぐる Psychomachia も表現されていると考えられるのである。しかしながら、道徳劇の基本構造 Innocence → Temptation & Fall → Sin → Repentance & Conversion に当てはめてみると、ジョン王がキリストに似せられ理想的君主に仕立て上げられている関係上、彼がいつ罪に陥っているのかを見定めることは難しいのである。強いて言うならば、Private Wealth と Sedition に脅迫されて、England の諫めにもかかわらず、Pandulphus に王冠と王笏を差し出して法王に帰属し、イングランドの主権を放棄したことにある。それでも、これに当てはまるのは Nobility, Civil Order, Clergy, Commonalty の方である。しかし、彼等には自分の

犯した罪のため魂の死を恐れて救済を求めるということがないのである。この点では、ジョン王の方が定式に合致していると言える。それ故に、人間の魂の救いというテーマに関しても、ジョン王が主人公にふさわしいのである。また、天の会議とも言うべき個所で、ジョン王が Verity によって賞讃され Imperial Majesty から是認されているのである。ここで注意すべきことは、ここに Mercy ではなく Verity が登場しているということである。そして、*Castle of Perseverance* の場合のように死ぬ時 Mercy を求めたかどうかではなく、彼はジョン王の生前における信心深さと業績を評価し、さらに他のイングランド出身の登場人物だけを無償で悔悛へ導くのである。つまり、ルターも説いている(42) 予定論の影響を受けていると考えられるのである。また、この劇で注目に値するのは、*Castle of Perseverance* のように主人公が肉体的死を経験するということである。これをもって、悲劇の萌芽の手掛りにしようとする向きもあるが、一面では、J. Bale が計らずも道德劇の古い型式に従ってしまった為であるという推測も成り立つのである。こうしてみると、不完全ながら *Kynge Johan* はジョン王を主人公にした道德劇であると考えることが出来るのである。そして、劇の主題と主人公の調和した劇となるのである。(43)

VIII 結 論

劇 *Kynge Johan* は歴史上の人物 John Lackland と Pope Innocent III との対立を題材にした寓意劇であるために、道德劇として見た場合と歴史劇として見た場合では、主人公が異なり、劇の主題と主人公が調和しない劇に見えるのである。ところが、J. Bale がこの *Kynge Johan* を創作した年代は、中世宗教劇が押し並べて衰退しつつある時期に当り、劇を一つの範疇で割り切ることの困難な状況にあったのである。そ

ここで、この劇を史実と照らし合わせてみると、単に年代記に則した歴史劇ではなく、歴史家 J. Bale の反カトリック的史観から表現されていることが分るのである。それでは、結局、彼はジョン王をどのような登場人物にしようと意図しているのかを考察してみると、劇の登場人物と新約聖書の人物とを対応させてジョン王と *Imperial Majesty* を一連の登場人物と見立て、ジョン王を理想的君主に仕立てているのである。つまり、この両者で *Ideal Kingship* というべきものを表現しようとしているのである。従って、ジョン王と *Imperial Majesty* が道徳劇 *Kynge Johan* の主人公と成り得る条件を備えたことになるのである。そして、このような観点から吟味してみると、一応、定式にはまっており、ジョン王をこの道徳劇の主人公と考えることが可能となるのである。

しかしながら、主題と主人公が調和するように *Kynge Johan* を道徳劇として分析出来たかに見えるからと言って、この劇の全体像を解明したことにはならないのである。それというのも、この劇の登場人物の大部分が寓意的名称を持っていたとしても倫理価値を外在化しているのではないからである。さらに、主要な登場人物が歴史上の人物と表裏一体となっている。それ故に、登場人物も *Castle of Perseverance* のそれとは違って、主人公の内的葛藤を客体化するものではなく、従って、この劇に *Psychomachia* が見られるとは言っても典型的なものとは質が異っているのである。また、道徳劇の主人公は罪に陥入って *Death* の恐れを抱くと *Mercy* あるいはそれに準ずるものを求めるのであるが、この劇には寓意的人物 *Death* と *Mercy* が登場しないだけでなく、登場人物が自らの罪を省みて自分の魂の滅びを恐れるということがないのである。つまり、道徳劇の図式通りには人間の魂の救済の成就を表現しておらず、中世キリスト教神学ではなく、むしろルター神学に依拠しているのである。さらに、道徳劇とは永遠的現在とも言うべき時空において人間の典型を表わす登場人物の人生における道徳上の推移を示すものであるが、

この劇では時間が1205年頃から1216年迄と1527年から1546年迄と定まっており、またジョン王はじめ多くの主要登場人物が歴史上の人物であるだけでなく、彼等の中には同一人物でありながら寓意的名称と歴史的名称を使い分けているものさえいるのである。しかも、この劇は新約聖書を下敷きにして登場人物の役作りをしており、本質的には伝統的宗教劇の領域を出たものではないのである。

劇 *Kynge Johan* は John Lackland と Pope Innocent III との対立に関わる史実に、衰微・変質しつつあった Morality Play の枠組みを当て嵌めて、Mystery Play の伝統をも踏まえ、国家主義とプロテスタント神学によって脚色して、イングランド宗教改革時代の政治・宗教両面の重要な問題に解答を出しうるように構成された反カトリック劇⁽⁴⁵⁾なのである。

一 注 一

※本稿ではテキストとして J. M. Manly, ed., *Specimens of the Pre-Shakesperean Drama* vol. I (Dover, 1967) を用いた。

- (1) 蛸原啓, 「John Bale の *King Johan* —主題と構造—」(九州大学英語英文学論叢, 1963), pp. 2-9.
- (2) T. B. Blatt, *The Plays of John Bale* (Copenhagen, 1968), p. 127.
- (3) *Ibid.*, pp. 126-7.
- (4) W. R. Mackenzie, *The English Moralities from the Point of View of Allegory* (New York, 1968), pp. 217ff.
- (5) A. Harbage, *Annals of English Drama 975-1700* (Methuen, 1964), pp. 2ff.
- (6) H. C. Gardiner, *Mysteries' End* (Archon Books, 1967), pp. 66 ff..
- (7) R. Potter, *The English Morality Play* (Routledge & Kegan Paul, 1975), pp. 94-5.
- (8) R. L. Duncan, "Protestant Themes and Theses in the Drama of John Bale," Diss. Indiana (1964), p. 5.
- (9) *Ibid.*, pp. 1-8.
- (10) H. C. Gardiner, *op. cit.*, pp. 52-3.

- (11) 野島秀勝, 『ロマンス・悲劇・道化の死—近代文学の虚実』(南雲堂, 1977), pp. 139-40.
- (12) P. J. Houle, *The English Morality and Related Drama* (Archon Books, 1972), xii.
- (13) Private Wealth = Pandulphus, Disimulation = Simon of Swinsett = Raymondus, Sedition = Stephen Langton, Usurped Power = Pope Innocent III.
- (14) T. B. Blatt, *op. cit.*, pp. 124-5.
- (15) R. Potter, *op. cit.*, p. 7.
- (16) *The Castle of Perseverance*, ll. 3130ff.
- (17) R. Potter, *op. cit.*, p. 49.
- (18) 半田元夫, 『イギリス宗教改革の歴史』(小峯書店, 1967), pp. 1-82.
- (19) R. L. Duncan, *op. cit.*, p. 8.
- (20) 八代崇, 『イギリス宗教改革史研究』(創文社, 1979), pp. 67-8.
- (21) *The Compact of the Dictionary of National Biography*, I (Oxford, 1975), pp. 1082-3.
- (22) *Kynge Tohan*,
- (23) 八代崇, *op. cit.*, 附録年表, pp. 31-3.
- (24) *Kynge Johan*, ll. 68-73, l. 101, ll. 367-71, ll. 673-8, ll. 1381-6, ll. 2365-6.
- (25) *Kynge Johan*, l. 1464, l. 2219.
- (26) *Kynge Johan*, l. 2109.
- (27) *Kynge Johan*, ll. 62-4: Mark 12. 40.
- (28) *Kynge Johan*, ll. 31-34: Matthew 7. 16-20, 15. 14.
- (29) Mark 11. 15-8.
- (30) Mark 14. 36.
- (31) *Kynge Johan*, ll. 1985-97.
- (32) *Kynge Johan*, ll. 2067-84.
- (33) *Kynge Johan*, ll. 2031-2: Luke 22. 42; ll. 2069-70: Matthew 27. 33-4; ll. 2123-5: Luke 23. 34.
- (34) *Kynge Johan*, ll. 2284-5: Acts 2. 33, I Corinthian 12. 3, John 14. 26, 15. 26, I John 5. 6.
- (35) *Kynge Johan*, l. 2354: Ephesians 5. 23; *Kynge Johan*, l. 2392: John 17. 11, I Corinthian 15. 57, Hebrews 4. 14, II Timothy 1. 12.
- (36) 八代崇, *op. cit.*, p. 77.

- (37) H・カメン,『寛容思想の系譜』成瀬治訳, (平凡社, 1970), pp. 62-3.
- (38) Stephen Gardiner, *De Vera Obedientia* (1535).
- (39) *Kynge Johan*, ll. 5-21, l. 68, ll. 136-150, l. 259, ll. 1279-81.
- (40) *Kynge Johan*, l. 2016, l. 2132, l. 2116.
- (41) 青木信義,「劇作家としての John Bale—歴史劇の目的と方法」(山梨大学教育学部研究報告, 1967), p. 7.
- (42) T. B. Blatt, *op. cit.*, p. 128.
- (43) *Castle of Perseverance*, l. 3007, l. 3129, ll. 3427-30.
- (44) マルチン・ルター,「聖パウロのローマ人にあたえた手紙への序言」『キリスト者の自由・聖書への序言』石原謙訳, (岩波文庫, 1955), pp. 88-9.
- (45) *Castle of Perseverance*, ll. 3001-29.
- (46) W. Farnham, *The Medieval Heritage of Elizabethan Tragedy* (Oxford, 1970), p. 248.